



# 筑紫女学園大学リポジット

## Drumming Over the Fences: The Revival of Eisaa and U. S. Military Bases in Postwar Okinawa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 真也 城田 愛, MORITA, Shinya SHIROTA Chika メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/920">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/920</a>

# フェンスをこえるエイサー —戦後沖縄における民俗芸能の復興と米軍基地—

森 田 真 也・城 田 愛

## Drumming Over the Fences: The Revival of *Eisaa* and U. S. Military Bases in Postwar Okinawa

Shinya MORITA and Chika SHIROTA

### 1 はじめに

今日の沖縄は、多くの観光客が降り立つ。沖縄県の統計によると、年間入域観光客数は2016年で過去最大の約861万人であるという（註1）。日々、多数の観光客を乗せた飛行機が那覇空港を離発着していることになる。しかし、沖縄の青く澄み切った空に目を向けると、飛んでいるのは旅客機だけではない。米軍の軍用機、軍用ヘリ、さらには自衛隊の軍用機が大きな爆音をあげて飛行する。とくに普天間基地、嘉手納基地周辺では顕著である。住宅地と隣接する米軍基地は、人々の暮らしと直結している。沖縄の戦後史は基地と、そして1972年の「施政権返還（本土復帰）」後は観光と密接に関わりながら進展してきたといえる。

しかしながら、これまでの民俗学や文化人類学は、基地や軍隊、さらには戦争を積極的に研究対象とはしてこなかった（森田 2015a）。かつての民俗学や文化人類学は閉じられた共同体を想起し、人々の実践に関する個々の事例を凝視していたことにより、巨大な世界システムや政治的な流れに多くの関心が払われなかったのである。一方、社会学もまた統合された社会を前提に研究を進めてきたため、その社会システムそのものを破壊する、もしくは外部から来る暴力＝戦争を例外的なものとしてしか扱ってこなかった（荻野 2016、関 2016）。そのようななか、田中雅一（2004）は文化人類学の立場から、軍隊を研究の射程に入れることを提唱している。その際、軍隊とそれを一部とする外部世界との相互関係に注目し、「ジェンダーと家族」、「地域社会との関係」、「国家との関係」、「軍隊の表象」の四つを、研究の命題としてあげている（田中編 2015：2）。

一般的な暮らしを営む大半の人々にとって基地や軍隊、戦争は、国家が介在する回避することが困難な大きな外部からの圧力であり、社会変動を招くものである。毎日の暮らしのなかで基地と向きあってきた人々の経験は、閉じられた地域社会をこえて、支配、移動、記憶、継承、表象に関わる相互交渉として再定置化されうるものなのである。

以上をふまえ、本論の目的は、民俗芸能「エイサー」を、「基地」というキーワードで、戦後沖縄の社会変化と共に読み解いていくことにある。なお、ここでいう民俗芸能とは、それぞれの地域の生活のなかで、信仰や儀礼とともに伝承された民間の芸能を指す。民俗芸能は、これまで「地域」と「伝統」の枠で捉えられてきた。エイサーも同様である（琉球新報社編 1984、宜保 1997等）。エイサーとは、「主に沖縄本島、およびその周辺離島で旧暦の盆（以下、旧盆）の夜に青年男女によって行われる太鼓踊りである。男性は大太鼓、締め太鼓やパーランクーという片面張りの小太鼓を打ち、女性は手踊りで隊列を組み、集落をまわるスタイルが主流である」（森田 2015b：61）。エイサーは、沖縄本島中部がその中心であり、祖先供養を目的とし、各町内、地域ごとに青年会を母体とした小さな団体によって維持されてきた（註2）。参加資格は、各地の青年会のメンバーに原則限定されている。しかし、今日、エイサーの演舞の機会は、旧盆以外に拡大し、地域をこえた場所やイベント、観光の現場、移民先等で演じられることも増えている（城田 2001等）。また、地域にとらわれない新興のエイサー団体も増加し、県内外の人気を集めている。

本論では、戦後、米軍基地によって集落のあった土地を奪われた、嘉手納町の「千原エイサー保存会」の事例を中心に、戦後のエイサーの復興と活動、さらには地域社会と基地との関わりについて考察していく。

## 2 戦後沖縄の地域社会と米軍基地

戦後の沖縄社会を考える前に、米軍基地について概観する。戦後沖縄は、1952年の「サンフランシスコ講和条約」によって日本と分離され、米軍の直接統治となった。その後、行政組織として琉球政府が立てられたが、その上部に琉球列島米国民政府が置かれ、実質的には1972年まで米軍の支配下にあった。この間、軍事基地化、あわせて近代化、民主化が進められた。

2015年の時点で米軍基地関係施設の総面積は、229,921千㎡、施設数32、沖縄県土面積に占める割合は約10%である（註3）。実に日本の米軍施設の約74%が沖縄に集中している計算となる。過密で住宅地と隣接する基地は、これまでも様々な軋轢、事故・事件を生んできたが、とくに戦後すぐの時期から人々を圧迫してきたのは、民意を度外視した基地建設とその維持であった。その代表が基地となる土地の強制的な接収である。

米軍は戦争終結後、住民を各地に設けられた収容所にいったん送り、その後、元の居住地に戻ることを許したが、すでに基地建設が始まっており、帰村がかなわなかった例も少なくない。その場合、元々の住民は、基地の周辺に住みながら、旧集落への帰還を陳情したが、その後、近隣

の市町村に分散して生活することになった。宅地や農地だけでなく、集落全体が完全に基地内となり、70年以上たった今でもその地を踏むことが出来ない状況もある。戦後沖縄においては、このような土地収用が、多くの場合、戦後の混乱期に米軍の基地建設のために、住民の意思を無視して強制的になされたという特徴をもつ。

沖縄を占領した米軍は、「戦時国際法」により土地を占有していたが、「サンフランシスコ講和条約」の締結により、戦時ではなくなったことから、土地の確保に法的な処置が必要となった。さらに、地代の支払い要求、基地反対運動も激しくなっていた。米軍は広大な軍用地の賃貸契約を結ぶため、1952年に「契約権」という布告を公布したが、格安の借地料とあわせて、20年使用という条件は大きな反発を招いた。そのため、契約が成立しなくても、一方的に土地が使用出来ることを取り決めた。それが1953年に公布された「土地収用令」（米国民政府令第109号）である。同布令により多くの土地の接收が行なわれたが、後に1957年廃止された。このような軍用地の強制収用は、その強権的手法から、「銃剣とブルドーザー」による土地の収奪といわれている。

1956年、アメリカ議会に報告された「ブライス勧告」によって、在沖縄米軍の政策は全面的に肯定され、地代の一括払い、土地買い上げの必要性、米軍駐留と長期的に基地を維持することの正当性と必要性が確認された。当然ながら、このようなことは沖縄の人々の反基地闘争の炎上を招き、琉球政府と米国民政府の綱引き後、賃借料の増額、原則、毎年の支払いが約束された。

このような流れによって、米軍側は土地の使用の合法性を獲得し、基地の長期的維持を可能にした。一方、住民側は地代の引き上げ、軍用地料という経済的保証を得た。そして、米軍対沖縄住民という対立構造が明確になり、その動きは「祖国復帰運動」につながっていった。しかしながら、その後、「本土復帰」し継続して軍用地料収入を得ることは出来ても、基地となった土地は戻ってこなかったのである。

上記したような基地建設やその後の軍用地問題は、これまで沖縄戦後史の矛盾として多くが語られてきた。しかし、近年、ようやく民俗学や文化人類学の分野でも研究がなされるようになった。政治思想史が大きな政治的な流れを批判的に取り扱うのに対して、民俗学や文化人類学では、強硬な圧力として存在しつづけている基地という現実を、そこに暮らす人々がどのように受け入れ、また反対しながら生き抜いているのかを捉え、考察している点に特色をもつ。そして、最近の研究においても、米軍基地と地域社会の関係性が問われている。そこでは、軍用地返還後の土地利用（武井 2013）、軍用跡地の開発（越智 2015）、軍用地料をめぐる裁判（陳 2007）等が主題とされている。これらはまさに公的権力と地域社会の在り方を、人々の側からその相互交渉を含め、研究の射程として据えたものである。また、同時に地域社会が保持してきた伝統的生活や価値観と戦後の米軍基地に端を発する社会変化との関わり、そこにある葛藤や矛盾、人々の創造的営みを考察しようとしたものである。

嘉手納町もまた、1945年以降、現在まで米軍基地と強く関わりをもってきた場所である。嘉手納町は、沖縄本島中部に位置し、戦前は旧北谷村（現北谷町）の一地区であったが、基地建設にともない、村域が分断されたことにより、1948年に嘉手納村として分立した。13字のうち、水釜、

かねく、かでな、やら、のくに、くになお、ひがし、のざと、くどく  
兼久、嘉手納、屋良、野国、国直、東、野里、久得の9字が米軍基地に接収されている。1976年に町制施行がなされ、2017年1月現在、約5,500世帯、人口1万3,700人、町域の約82%が米軍基地である。

嘉手納町に常駐している米軍は、嘉手納飛行場(Kadena Air Base)と嘉手納弾薬庫地区(Kadena Ammunition Storage Area)、陸軍貯油施設 (Army POL Depots) である。通常、嘉手納飛行場は、嘉手納基地とよばれ、嘉手納町、沖縄市、北谷町、那覇市の一部にまたがる、総面積19,855千㎡、極東最大の米空軍の飛行場であり、返還の話すら出ていない。主として使用する、米空軍第18航空団は、F-15C イーグル戦闘機他を有しており、活発な軍事的な運用が常時なされている(沖縄県総務部知事公室基地対策課編 2013:247-257)。一方、嘉手納弾薬庫地区は、総面積26,585千㎡、アジア・太平洋地域に展開する米軍の使用する弾薬の貯蔵、整備を行なっている施設である(沖縄県総務部知事公室基地対策課編 2013:242-246)。米ソ冷戦当時は核兵器貯蔵、ベトナム戦争時には毒ガス兵器貯蔵への懸念、過去には、航空機事故、環境汚染事故もあり、非常に危険な施設である。あわせて、沖縄で最も実戦的、過激で危険な戦闘配備がなされている基地とされる。

嘉手納町においては、北部の嘉手納弾薬庫地区、南部の嘉手納飛行場に挟まれた、東西の細長い狭い場所が、住民が暮らす町域となっており、日々、上空には離発着の軍用機が行きかう。一方、嘉手納町にはその引き換えとして、国からの各種の交付金と軍用地料が落とされ、かつての宅地や農地を接収されている個人・団体の軍用地主には、年間賃借地料が支払われている(註4)。

### 3 共同体意識の復興とエイサー

本論で取りあげる嘉手納町千原(センバル、シンバル)地区もまた、戦後すぐに米軍基地に飲み込まれた地域である。元々、千原は在来の農村ではなく、1827年頃より首里・那覇・久米系士族が移り住んで帰農し、新たな共同体を形成した、いわゆる「ヤードゥイ(屋取)」集落で、「シンバルヤールイ(千原屋取)」とよばれていた。千原では、旧士族の末裔として、他の農民とは異なる自己認識を保持し、裕福でないながらもユリと甘藷の栽培をし、勤勉に働き、徐々に野里から土地を取得して集落を拡張したという。そして、北谷村野国から1937年に分離し、行政的にも字千原となった。当時の戸数は52戸であった(註5)。

第二次世界大戦末期の1945年4月1日、米軍は沖縄本島の読谷<sup>よみたん</sup>から北谷にかけての海岸から上陸作戦を開始し、千原集落は即時占領された。過酷な戦中、旧羽地村他に疎開避難していた住民は、占領軍である米軍によって石川、田井等の収容所に収容された。1946年11月、米軍が移動許可を出した後、現嘉手納町域に戻り、翌年から旧千原集落周辺を「黙認耕作地<sup>はわじ</sup>」として農耕に従事していた人もいたが、朝鮮戦争の激化を背景に、1952年頃から飛行場拡張工事のため、周辺全地域が立ち入り禁止となった。こうして旧千原集落の全域が飛行場に接収されたのである。なお、

沖縄には米軍基地の建設によって、旧集落近くにそのまま新しい集落が移転している例もあるが、同年以後、旧千原の住民は、住む場所を失い、嘉手納町域だけでなく、読谷村、沖縄市、北谷町等に分散して居住するようになった。戦後周辺に戻ってきていた人も多くいたが、嘉手納町域が狭く、土地が限定的であるため、約三分の一の住民が、他に住む場所を探さざるを得なかった。そのため、旧千原の住民は行政区として現居住の自治会に加入しているという状況である。

ここで重要なのが、旧土族というルーツ、先人たちが勤勉さと英知によって寄留地において安住の地を獲得したという「物語」、そしてその土地を自らの意思とは反する戦争と米軍基地によって喪失してしまったという「記憶」である。現在、そのような「記憶」を継承し、旧千原の住民を強く結びつけているのが「千原郷友会」である。千原郷友会は、1960年5月5日に結成され、2008年に一般社団法人になっている。2007年に嘉手納ロータリーの再開発に伴い、同ロータリー内に事務所を作った。登録世帯は約300戸で、主な活動内容としては、総会、敬老会、生年祝い、ピクニック、旧暦5月5日「土帝君拝み」、旧暦12月24日土帝君への「御願解き」があげられる。なお、ここでいう郷友会とは、同郷人による結合組織のことである。県外で居住する人々が故郷を核とした同組織を形成するケースが多いが、千原のように県内の他地域へ移住を余儀なくされた旧住民が郷友会を結成し、会員の親睦や情報交換だけでなく、宗教的行為、相互扶助、政治的機能を保持している例もある。とくに千原郷友会では、集落の共有地が軍用地となり、地料が入ることから、共有財産の管理等、社会的に重要な機能も併せもっている（註6）。地料は旧千原集落の個人の土地でない所を共有地として申請、認可を得たことによって発生している。これは千原の先輩たちが、土地の権利を個人で分けずに、あえて共有地として設定し、旧千原集落としての結束の機会と今後の可能性を残したことによるという。地料は郷友会の重要な資金源の一つにもなっている。

特筆すべきは、戦後の千原郷友会結成の原動力になったのが、千原エイサーという点である。現在の千原郷友会があるのは、エイサーを核にして絆を継承してきた、先人、先輩たちのおかげとして語られている。1956年、1957年、コザ市（現沖縄市）で開催された第1回と第2回「沖縄全島エイサーコンクール（現沖縄全島エイサーまつり）」への出演を機会に、旧千原の住民が結束し、郷友会結成の機運が高まった（千原誌編集委員会編 2001：64）。

千原エイサーの踊りの型の起源の詳細は不明であるが、1850年頃、集落の戸数が増加して、人員が増えた際に定まったとされる。以前は、「ヤイサー」とよび、「久高節」から始まったという。1940年頃には、参加者は18歳から45歳まで、35人から45人だった。構成は、旗頭、締め太鼓、大太鼓、男性の手踊りとなる。演目は、「久高節」、<sup>チュンジュンナガレ</sup>「仲順流れ」、<sup>グイークヨー</sup>「越来ヨー」、<sup>イチチュビグッシ</sup>「イチチュビ小節」、<sup>イジュヌガマクブシ</sup>「伊集のガマク節」、<sup>シュウノウブギョウブシ</sup>「収納奉行節」、<sup>トシンドーイ</sup>「唐船ドーイ」の7曲である（註7）。

千原エイサーは一見シンプルであるが、勇壮・快活かつ優美な演舞として知られている。その特徴は、(1)「イキガーエイサー（男性のエイサー）」といい男性のみで演じられるということ（女性の手踊りが無い）、(2)「仲順流れ」の前の文句に祖先供養を意味する「南無阿弥陀仏」という言葉が使われていること、(3)「久高節」他の男性の手踊りに空手の型が取り入れられており、



全体的に手踊りの比重が高いこと、(4) 現在、多くのエイサー団体のように地域と直結した青年会ではなく、郷友会とは別に組織されている千原エイサー保存会で演じられていることがあげられる(註8)。そのため、参加年齢の制限が緩やかである。

この千原エイサーは、「千原の人々の心の象徴」であるという。同保存会メンバーからは、エイサーを行なうことは、戦後、異なる場所で居住せざるを得なくなったが、千原の先人たちが作ったものを結束して継承するという意味をもつと説明される。土地を奪われた千原の人々が、元々の郷里を強く意識しながらつなぐことができるのは、先人から引き継いだエイサーのおかげであるというのである。エイサーは、郷里の祖先、先人、先輩、現在の仲間、そして観客と結びつく重要な機会なのである。

#### 4 米軍基地のなかでの演舞と道ジュネー

通常、各地の青年会によるエイサーは、若い男女によって旧盆の旧暦7月13日の「ウンケー(お迎え)」から7月15日の「ウークイ(お送り)」の期間、とくに祖先を供養する意味で15日の夜に演じられることが多い。千原エイサー保存会では、翌16日に関係する家々等を廻る「道ジュネー」が行なわれている。一般的に道ジュネーとは、地謡、旗頭、大太鼓、締め太鼓、パーランクー、手踊り等での隊列を組み、演舞を行ないながら、集落内の各家々を廻り歩くことである。

千原エイサー保存会の他に類例の少ない活動として、道ジュネーをする前の米軍基地内の演舞があげられる。演舞が行なわれるのは、嘉手納マリーナ(Kadena Marina)内の「土帝君(トゥーテイクー)」の祠の前である。この奉納エイサーは、1990年代頃に現在の場所で復活された。嘉手納マリーナは、嘉手納飛行場西部の国道58号線をこえた場所にある米軍施設である。軍用船の寄港地ではなく、軍人・軍属の家族の保養のための施設となっている。レストラン、ヨットも多数並ぶが、海水浴を目的とした家族連れが多い。一応、ゲートもあり、かつては常時、警備がなされていたというが、通常、海水浴や釣りならば、関係者以外もなかに入ることを黙認されている。

土帝君の祠は、ゲートをこえて嘉手納マリーナ内の海浜を横切り、野国川を渡った海に面した小高い個人の所有地にある。祠は陸軍貯油施設のフェンスのすぐ近くの黙認耕作地の隣に位置する。人々は戦前、旧千原集落の中央部、タカンニグーフとよばれた場所に土帝君の祠を祀り、地域の結集の拠点として信仰し、繁栄と安寧、健康、豊作を祈願していた。この祠は戦中の混乱と戦後の土地収用によって集落とともに破壊された。その後、土帝君の祠は、1957年旧9月3日、千原郷友会結成の3年前に再建された。その後、1990年、千原郷友会創立30周年記念事業として石碑を設置し、その際、祠の横にかつての集落の8ヶ所の出入り口を守ったという「八門又神(ヤジョウヌカミ)」、「竜宮神」の碑も設置した。そして、参拜日も旧暦5月5日に統一した。

なお、ここでいう土帝君は中国由来の土地神である。沖縄県下では地域によって小祠として祀られており、中国からの伝来を由来譚としてもつ場合もある(註9)。千原では中国伝来の土帝

君を祀ってきたことが、他の農村集落と異なる旧士族の末裔を自認する根拠の一つとされている。現在、米軍基地の内に密やかに留まる土帝君は、可視的な千原のシンボルであり、傍らには「千原の拝所」とかかれた石碑が置かれている（註10）。

以下、2015年、2016年の現地調査から、土帝君の祠の前での奉納演舞と道ジュネーについて記述していく。まず昼に嘉手納ロータリー内にある、千原郷友会事務所にエイサー保存会メンバーとその家族、関係者が集合し、昼食をとり、着付け等の準備をする。そして、13時半、若手を中心にメンバーを選抜し、事務所から嘉手納マリーナへ車に分乗して移動する。マリーナ内の野国川を歩いて渡り、土帝君の祠の前に到着する。

祠の前では両年ともエイサー保存会副会長から、千原集落の歴史、米軍基地との関わり、エイサーが祖先供養の意味をもつことについて説明が行なわれた。2016年は、会長が到着するまでの間、先に手踊りの「ユガフ（世界報）」、「アヤグ」を奉納した。全員集合し、保存会会長と副会長を中心に、土帝君の祠の前に線香と鳥酒（泡盛）を供え、全員で手をあわせて祈願をした。そして、地謡による「久高節」と「仲順流れ」の曲にあわせて、エイサーの奉納が行なわれた。この道ジュネーの前に行なわれる土帝君の祠の前の奉納演舞を「オトシ（お通し）」とよぶ。オトシは戦前においても必ず行なわれており、祖先への祈願、千原の子孫繁栄、エイサーの安全を祈るものとされている。

その後、基地外に戻り、道ジュネーとなる。エイサーの隊列は、地謡、旗頭、締め太鼓、大太鼓、手踊り、会長、副会長他、合計約40人となる。締め太鼓が先頭になり全体の流れを作るのは、他の地域とやや異なる点で、つづく大太鼓は最近の新興のエイサー団体のように振り回さず、全体のテンポとリズムをしっかりと維持する役割とされている。

主に水釜から新町通り商店街周辺の千原関係者の個人宅、個人事業所、店、高齢者福祉施設、病院、郷友会事務所前を順番に廻る。途中、約10人の子供会のエイサーが隊列に合流する。夕刻から「嘉手納エイサーまつり」に加わり、商店街で3回演舞を行なう（註11）。夜遅い時間となるため、子供会が帰る。その後、千原エイサー保存会は、総踊りには参加せず、再び道ジュネーに戻り、個人宅、個人事業所、店等を廻り、22時半に事務所に戻る。道ジュネーでは、嘉手納町域を中心に千原関係者の家々他、全部で約20ヶ所を廻る。最後に事務所に戻って反省会となった。

ここで重要なのが、エイサーが個々人の家の祖先を祀るものだけではなく、集合的な共同体の祖先を、現世の人々が集団で祀るという意味をもつことである。そこでは千原の先人たち、祖先所縁の拝所である、土帝君がその中心的存在として、常に起点とされてきた。エイサーのはじまりの祈願は、祖先に対してだけでなく、今を生きる人々の幸福と安寧、安全を同時に神へと祈る行為なのであり、さらに祈りを通して人々を心的に結びつけるものと理解出来る。そのため、毎年、エイサー演舞の出発は、基地内の旧千原集落の端に再建された土帝君の祠の前でなければならないのである。集落が無くなったことで人々が分散し、エイサーが一時中断されたが、復興後、集落が無いことによってエイサーのもつ社会的、象徴的意味あいがいより強化された。そして経済的背景をも含め、基地があるがゆえに、エイサーを積極的に継続して（出来て）いるという側面



ももっている。

## 5 エイサー保存会の活動とイベント

続いてみていくのが、千原エイサーの旧盆以外の活動である。エイサーが演じられるのは、旧盆の時期だけではない。戦前から、旧盆以外に演舞の機会があったことが伝えられている。その一つが、1915年、旧北谷村主催の「大正天皇御即位祝賀芸能大会」でのエイサー披露である。これによって、千原エイサーの名声が近隣に広まったとされる。

そして戦後、1948年、嘉手納村としての分立祝いの際に、余興として配膳された米軍の食器のトレイを即興で太鼓の代わりに叩いたことがエイサーの復活の最初とされている。その後、物資のない時代、米軍払い下げの一斗缶を切って太鼓の代わりに叩いた。当時はまだ路上での演舞はなく、関係する各家々を廻っての披露であった。1960年頃までは千原は公的な行政区でないため、嘉手納町域でも遠慮をしながらエイサーをしており、外にも出にくい雰囲気があったという。1953年、那覇高校で行なわれた「全琉エイサーコンクール」に出演して観客を大いに沸かせたが、女性の踊り手がないこともあり、米軍関係者に評価されなかった。しかし、1957年、千原青年会として「波之上納涼祭」に参加し、1960年代に入り、メンバーの技能も資質も充実していったという。

千原エイサー保存会結成のきっかけになったのが、1976年、千原エイサーが嘉手納町教育委員会から「嘉手納町文化財」の指定を受けたことである。この文化財指定を契機に、千原エイサーが価値あるものであることを自他ともに認めるようになった。

現在、千原エイサー保存会は郷友会のメンバーを主体として、他地域からの加入も認め活動している。そのため、郷友会の会員でなおかつ保存会の会員のメンバーもいるが、保存会の会員であっても千原にルーツをもたないことから郷友会不参加の者もいる。2016年現在、保存会の登録メンバーは約70人、うち千原関係者で無い外部からの参加者が17人入っている。参加にあたっては、強い気持ちをもつこと、積極的に練習に参加することが条件となっている。保存会の内部は、子供会（小学生、中学生）、青年部（16～40歳）、壮年部（41～65歳）、有志（65歳以上）となる。2010年には、千原郷友会のエイサーの継承者が評価され、沖縄県から「沖縄県文化功労者」として表彰を受けている。

沖縄県内で最も有名で、大きく長く続いているエイサーイベントは、沖縄市で開催されている「沖縄全島エイサーまつり」である。当初このイベントは、1956年、コザ市（現沖縄市）主催であり、「沖縄全島エイサーコンクール」という呼び名で、各地の青年会のエイサーを一同に集め、その技能を競った。前述したように、千原エイサーも第1回のコンクールに千原青年会として出演し、準優勝している。参加のきっかけは、当時のコザ市長大山朝常から「復興と地域の活性化のため出てくれ」、「年配の人が昔からのエイサーがみたい」ということで要請があったことによるという。その後、1957年第2回、1965年第10回、1967年第12回に出演、いったん出演を取りや

めて、再度、1977年第22回、1984年第29回、1985年第30回、そして1987年第32回以降は、毎年、招待参加をしている（註12）。その参加は名誉なこととされており、事前の練習においては毎年気持ちが引き締められている。

その他、1975年、「沖縄国際海洋博覧会」の「日本の民俗芸能の祭典」で阿波踊りと共演し、一緒に道ジュネーをしている。そして、1991年、世界の沖縄系移民が母県に集う祭典である、「世界のウチナンチュ大会」で演舞。1992年、東京ドームで開催された「大琉球祭」に参加、さらには2013年のハワイ遠征等があげられる（註13）。

「沖縄全島エイサーコンクール」以降、地域の青年会主体のエイサーが、不特定多数の人に見えることを意識した芸能へと変化したこと、旧盆以外のイベントにも出場する機会が増えたことはよく知られている。戦後のエイサーの変容について久万田晋（2003：5）は、従来の手踊り主体から太鼓主体のエイサーへの変化、女性の参加、衣装の変化、従来 of 輪踊りから複雑な隊列踊りへの変化、さらに新たなクラブチーム型エイサーの台頭をあげている。

しかしながら、戦前においても旧盆以外に複数の地域のエイサーが集まり演舞する機会があった（註14）。それが芸能「トゥイケー」である。トゥイケー（取り替え）とは、交換・交流を意味し、エイサーを含む各地域の芸能を近隣の異なる地域に越境して行なうことをいう（註15）。交流範囲は、旧北谷村、読谷村の南部で、招待する側は食事を準備して、される側はそれを受けて、各自の芸能を披露し、楽しんだという。トゥイケーでは、人的交流や芸を競うだけでなく、相互の影響、新たな演出の導入、技法の向上にも寄与したことが推察出来る。現在の千原エイサー保存会の活動においても、このトゥイケーの考え方は生きており、イベント参加や地域外での演舞も重要な交流の機会の一つとして捉えている。

千原エイサーは戦後いち早く、エイサーイベントに出演することで、自分たちだけでなく、交換・交流を前提とした高揚感や一体感、外部からの期待と評価を獲得してきた。当時は、郷友会と保存会は一体であり、戦前からのメンバーも旧共同体との連続性を強く後輩に示してきた。さらにいうと、旧千原の住民は離散したままで、集住区を形成し、その後の自治会に移行出来なかった（註16）。結果、そのこともまたエイサーを起点とした参集、安定した郷友会活動により強い思いを集約することにつながったのではないだろうか。

上記した千原エイサー保存会の活動とイベント参加の事例をみてもわかるように、今日のエイサーは旧盆期間以外にも様々な機会、場所で演じられている。沖縄県外、海外における演舞の機会も増えている。しかしながら、千原という地名は、残念ながら公の書類から消えている。千原エイサーの場合、「沖縄全島エイサーまつり」他、各種イベント等で演舞することは、自己と他者の間に一旦境界を作り、交流をはかりながら絶えず自分たちの立ち位置を確認し、示すことに他ならない。エイサーの演舞は、より強く対外的に、さらには視覚的にアイデンティティ表明する手段としても機能しているのである。千原が人々の意識にありつづけるためには、千原エイサーを実践することをとおして、自己の存在を示しつづける必要があるといえる。

千原エイサーの最大の特徴は、フェンスを行き来しながら基地内の自らの旧集落跡地において

奉納演舞を継続している点、米軍に全て接収され物理的には消滅させられた「千原」という地域の存在、その帰属を、道ジュネーやイベントでの演舞を介して自他ともに対内・対外的にアピールしつつづけている点にある。フェンスをこえ、場所や機会をこえてエイサーを行なうことは、地域に戻り、アイデンティティを反復しながら、伝え、表明していることにほかならない。

このように千原エイサーという限られた踊りの場から、戦後沖縄と米軍、日米関係という大きな歴史的、政治的動き、強大な圧力下にある人々の実践と生きた相互交渉を読み取ることが出来るのである。

## 6 おわりに

なぜ、土帝君の祠は、嘉手納町域のアクセスしやすい、祭祀を執り行ないやすい場所に作られず、わざわざゲートをこえて行きづらい米軍基地内に造られたのだろうか。それは、フェンスに囲まれ返還不可能とされた土地にあえて自らの存在を刻み込むためではないか。場所をめぐる経験は、身体を介した感情と記憶によって形成され、社会的・政治的関係性において分節化されたり、結合されたりする。旧千原集落内に位置する土帝君の祠の前においてエイサーの演舞を継続的に実践することで、経験は世代をこえて共有され、その空間は皆が回帰する場所として意味付けられる。それは、自分たちの身体と儀礼を通して、分断された本来の千原の土地を自分たちの手に取り戻すことである。米軍基地のフェンスをこえて土帝君の祠の前で行なわれるエイサーは、旧千原の住民を故郷の地と結び付ける行為として必要なものである。そして、地域をこえての様々な場所での演舞もまた、各地に離散して居住せざるをえない千原の人々を再統合しながら、対外的にも自己の存在を示す重要な機会となっている。フェンスのなかの土帝君の祠の前でのエイサーと関係者の家々へ赴く道ジュネー、そして各地でのイベントでの演舞は、ともに千原エイサー保存会と千原郷友会の人々にとってなくてはならないものなのである。

沖縄本島に居住する人々にとって、基地や軍隊の存在は例外的なものではない。時には国家的暴力装置として人々を抑圧し、危険にさらし、時には改革と直接・間接的に「経済的恩恵」をもたらしてきた。戦後70年、好むと好まざるを別にして、常時、そこに在り続けてきている。

土帝君前での奉納演舞の最中にも、大きな音を立てた米軍の軍用機が上空を何度も飛行し、浜辺では何事も目に入らないかのように黒いサングラス、「白い肌」に大きなタトゥーの入ったビキニ姿の女性たちがその脇を横切った。

基地周辺の軍用機の爆音と燃料の臭いは、波の音や風の香りにも増して強い。そこには、迎合するわけではなく、抗しながらも、それを現実として生きなければならない人々の暮らしがある。旧千原集落の土帝君の祠は、フェンスのなか、長く巨大な滑走路の軍用機の車輪が大地に着陸する、まさにその場所にあったという。



(写真1) 土帝君祠の前での奉納演舞：嘉手納マリーナ内

(2016年8月18日：森田撮影)



(写真2) フェンス横の野国川を渡る (同撮影)

〈付記〉

本論は、平成27-29年度科学研究費補助金（基盤研究（C））、研究課題：「民俗芸能の観光化にみるグローバル化と再ローカル化に関する研究」（研究課題番号：15K01974）、研究代表者：森田真也、共同研究者：城田愛の研究成果の一部である。本論を執筆するにあたり、千原エイサー保存会の皆様に多大なご協力をいただきました。謹んで感謝の意を表したいと思います。また、沖縄市、うるま市他のエイサーと関係する様々な方々にもご協力を得ています。御礼申し上げます。



## 註

- (註1) 沖縄県のホームページによると、入域観光客数は861万3,100人で4年連続過去最高。対前年比プラス85万100人、率にして11%増となっている。「平成28年(暦年)沖縄県入域観光客統計概況(文化観光スポーツ部観光政策課:平成29年1月発表)」。  
<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/kikaku/statistics/tourists/h28tourists.html> (2017年2月13日閲覧)。
- (註2) エイサーについては、詳しくは沖縄市企画部平和文化振興課編(1998)を参照。戦後の展開については、久万田(2003)、森田(2015b)を参照。
- (註3) 沖縄における米軍基地の概要については、沖縄県総務部知事公室基地対策課編(2013,2016)を参照。
- (註4) 具体的な統計上の数字は、沖縄県総務部知事公室基地対策課編(2016)を参照。基地関係の補助金として、基地周辺市町村の負担軽減、生活環境の整備等のために国から交付される、特定防衛施設周辺整備調整交付金、国有提供施設等所在市町村助成交付金、施設等所在市町村調整交付金、米軍基地所在市町村活性化特別事業に関するもの(期間限定)等があげられる。ちなみに2014年度の嘉手納町の歳入総額のうち、基地関係収入は2割をこえ、沖縄県下でも比較的高い割合となっている。基地と嘉手納町の財政の課題については、桜井(1996)を参照。
- (註5) 千原集落の歴史については、千原誌編集委員会編(2001:10-11)、井口(2002:22)を参照。なお、嘉手納町史編纂委員会編(1990:61)では、1939年に分離となっている。嘉手納町の戦後史については、嘉手納町史編纂審議会編(2010)を参照。
- (註6) 難波(2017)は、従来のコミュニティ型郷友会に対して、軍用地等の共有財産の管理のための地縁的組織をアソシエーション型郷友会とよんで、その現状と課題について分析している。難波(2017)の分析は、やや利害集団としての側面が強調されているように思えるが、千原郷友会の当事者からは、軍用地という財産管理よりも、相互の親睦、扶助、連帯・連携、祭祀とアイデンティティの継承が強調して語られる。
- (註7) 演目の歌詞は、「千原の響」編集部編(2013:116-119)を参照。
- (註8) 千原エイサーの特徴については、千原誌編集委員会編(2001:228)、および、嘉手納町史編纂委員会編(1990:566-572)を参考にした。
- (註9) 土帝君は、中国ではしばしば「土地公(福德正神)」とよばれ、広域かつ多様な信仰形態をもち、地域や個人において多種多様な願いを聞いてくれる庶民の神として信仰されている。沖縄においても伝来し、地域で祭祀されている例もある。詳しくは、窪(1981)を参照。
- (註10) 現在、旧千原集落にあった共同井泉も同地に祀られている。沖縄では、共同井泉は聖地として祭祀の対象となる。小港井戸(クナトカー)、金城前井戸(カナグスクヌメヌカー)、源河井戸(ジンカカー)、渡口井戸(ワタイグチヌカー)の石碑が立てられている。
- (註11) 「嘉手納町エイサーまつり」は18時半開始となる。以前は商店街組合主催であったが、今日では



嘉手納町商工会が事務局となり、実行員会を立ちあげている。2015年、2016年の出演団体は同じで、嘉手納町内の南区青年会、北区区民エイサー、西区青年会、東区エイサー実行委員会、西浜区青年会、中央区青年会、千原エイサー保存会となる。演舞の順番は年によって異なる。商店街を嘉手納ロータリー方面へ進み、各団体が3回演舞し、最後全員で「エイサーガーエー」とよぶ総踊りとなる。露店も出て、町内外の人々が集まり、盛大に行なわれている。

(註12) 千原エイサー保存会の活動については、千原郷友会創立50周年記念事業実行委員会記念誌編集部編（2012：89-126）を参照。「沖縄全島エイサーコンクール」が「沖縄全島エイサーまつり」になったのは、1977年の第22回からである。

(註13) なお、2015年のイベント参加としては、9月6日「沖縄全島エイサーまつり」、9月20日「嘉手納町納涼まつり」、10月4日「野国総管まつり」、8月14～24日ドイツへの遠征となっている。

(註14) 久万田（2003：3）によると、明治期においてエイサーが、旧盆以外のイベント、例えば公的な物産品評会や展示会において演舞されていたことが新聞資料によって確認出来るという。

(註15) 他地にトゥイケーに出かける前にも、土帝君の前で祈願をした。トゥイケーには、誰もがいけるのではなく、選抜されたメンバーのみであり、技能が足りないと判断された者は参加出来なかった。

(註16) 山城（2007）では、同じく基地に集落ごと接収された嘉手納町の旧屋良の事例が報告されている。旧屋良の住民たちは、新しく出来た東区の構成員となっている。東区では、新住民を含む東区自治会としての行事や活動、別途、旧屋良の住民たちによる屋良共栄会の行事と活動が対立することなく行なわれている。旧盆には、新しく作られた東区青年会のエイサーと屋良共栄会青年部のエイサーが演じられている。旧屋良の関係者は、東区青年会の活動を30歳で終えた後、屋良共栄会青年部に編入するという配慮がされている（山城 2007：258-261）。

## 参考文献

- 井口淳子 2002「生き延びた民俗芸能—沖縄・千原（せんばる）エイサー—」『阪大音楽学報（大阪大学文学部・大学院文学研究科音楽学研究室）』第1号 21-31頁
- 沖縄県総務部知事公室基地対策課編 2013『沖縄の米軍基地』沖縄県
- 沖縄県総務部知事公室基地対策課編 2016『沖縄の米軍及び自衛隊基地（統計資料集）』沖縄県
- 沖縄市企画部平和文化振興課編 1998『エイサー360度—歴史と現在—』沖縄全島エイサーまつり実行委員会（那覇出版社）
- 荻野昌弘 2016「戦争と社会学理論—ホモ・ベリクス（Homo bellicus）の発見—」好井裕明・関礼子編『戦争社会学—理論・大衆社会・表象文化—』明石書店 17-35頁
- 越智郁乃 2015「ゲート前という接触領域—沖縄県那覇市新都心における軍用地の記憶と返還地の開発—」『コンタクト・ゾーン』第7号 33-55頁 <http://hdl.handle.net/2433/209810>  
（京都大学学術情報リポジトリKURENAI：2017年3月1日閲覧・ダウンロード）

- 嘉手納町史編纂委員会編 1990『嘉手納町史（資料編2）民俗資料』嘉手納町役場
- 嘉手納町史編纂審議会編 2010『嘉手納町史（資料編7）戦後資料（上）』嘉手納町教育員会
- 宜保榮治郎 1997『エイサー 沖縄の盆踊り』那覇出版社
- 窪 徳忠 1981「中国の土地神信仰と南島」『中国文化と南島』第一書房 264-332頁
- 久万田晋 2003「エイサーにおける継承・伝播・創造の現代的展開」『エイサー・阿波おどり・よさいこい祭りにおける民謡・民俗芸能の継承・伝播・創造の現代的展開』（平成12-14年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））：研究課題番号：12610308、研究代表者：岩井正浩） 3-12頁
- 桜井良治 1996「嘉手納町財政と基地対策」『静岡大学法経研究』第44巻第4号 23-48頁  
<http://doi.org/10.14945/00004871>（静岡大学リポジトリ：2017年3月9日閲覧・ダウンロード）
- 城田 愛 2001「越境する沖縄女性たちの生活誌—戦後の沖縄、ハワイ、米軍基地における踊りの舞台から—」『移民研究年報』第7号 145-161頁
- 関 礼子 2016「戦争をめぐる社会学の可能性」好井裕明・関礼子編『戦争社会学—理論・大衆社会・表象文化—』明石書店 7-35頁
- 千原郷友会創立50周年記念事業実行委員会記念誌編集部編 2012『かたやびら—千原郷友会創立50周年記念誌—』千原郷友会事務所
- 千原誌編集委員会編 2001『嘉手納町千原誌』千原郷友会
- 「千原の響」編集部編 2013『千原の響』嘉手納町千原郷友会
- 武井基晃 2013「軍用地返還後の土地利用と暮らし—西原飛行場一帯の原状と現状—」『沖縄民俗研究』第31号1-8頁
- 田中雅一 2004「軍隊の文化人類学的研究への視角—米軍の人種政策とトランスナショナルな性格をめぐって—」『人文学報（京都大学人文科学研究所）』第90号 1-21頁
- 田中雅一編 2015『軍隊の文化人類学』風響社
- 難波孝志 2017「沖縄軍用跡地利用とアソシエーション型郷友会」『社会学評論』第67巻第4号 383-399頁
- 陳 泌秀 2007「金武区軍用地料裁判から読み取る村落文化の伝統と変化」『沖縄民俗研究』第25号 1-29頁
- 森田真也 2015a「占領という名の異文化接合—戦後沖縄における米軍の文化政策と琉米文化会館の活動—」田中雅一編『軍隊の文化人類学』風響社 139-175頁
- 森田真也 2015b「地域を演出する」福田アジオ他編『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房 61-72頁
- 山城千秋 2007『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』エイデル研究所
- 琉球新報社編 1984『沖縄大衆芸能エイサー入門』琉球新報社

（もりた しんや：日本語・日本文学科 教授）

（しろた ちか：大分県立芸術文化短期大学国際総合学科 准教授）